
水底の夢

淡海いさな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水底の夢

【Nコード】

N9066V

【作者名】

淡海いさな

【あらすじ】

水力をもって栄えるアイレンベルク。けれど、住民たちが知らぬ間に妖しい影が忍び寄っていた。そこへ訪れる獅子の頭を持つ旅人。男は街の少年と出遭い、友情を育み、そのうちに街に起こった異変の原因へと迫っていく。

改稿履歴（前書き）

改稿の履歴と変更された内容をお知らせするページです。

改稿履歴

最近の改稿内容

2011・09・08（木）

第1部 獅子と少年

ディアロがやってきた街を「パツフェルベル」から「パルマ」に変更。

他、一部誤字などを修正。

過去の改稿履歴

オマケ

200文字以上ないと投稿できないので、文字数の水増しとして、この世界の度量衡に関する設定を載せておきます。

この世界で最も一般的に使用される度量衡（単位系）は、大工や指物師としても優秀な技を持つドワーフ族が基準になっています。長さの単位を例にとると、日常でもっとも頻繁に使われる「スー」という単位は「ドワーフの成人男性の足の大きさ」に由来するとされています。

ただし、現実には、同じくドワーフ族の「歩幅」に由来する「ブージョ」 という単位と関連付けられ、「1スー」は「1/4ブージョ」と定められています。

「1ブージョ」は、「まず足を揃え、そこから左足を踏み出し、次に右足を踏み出した時の、起点から踏み出した右足までの長さ（つまり二歩）」で、現実の「およそ1メートル」に相当します。

つまり1スーは約25センチメートルです。

1シフ \parallel 1/20スー \parallel 約1.25センチメートル

1スー \parallel 1/4ブージョ \parallel 約25センチメートル

1ブージョ \parallel 約1メートル

1ロウ（・ブージョ） \parallel 20ブージョ \parallel 約20メートル

1リ・ロウ（・ブージョ） \parallel 400ブージョ \parallel 約400メートル

1ダーリ \parallel 4リ・ロウ \parallel 約1600メートル

獅子と少年

「おっと、悪いな。坊主、怪我しなかったかい」

それが男の第一声だった。ずっしりとした低音は、蒼生した大石を想起させる。

瞬間、ヨハンは自分の尻をしたたか打ちのめしてくれた石畳が、思いがけなく響いたいかにも痛そうな音に驚く余り、つい口を閉ざしているのを忘れて、謝り出してもしたかと錯覚した。

もちろん、そんなはずがない。

第一、声は上から降って来たのだ。もしも地面がある日突然宗旨替えをして、ぺらぺら喋り出したとしても、その際には大地の声は下から聞こえてくることだろう。

見上げれば獣の顔を持った巨漢である。隆々たる筋肉。豊かな体毛。前へと突き出た鼻に、結んだ口が二股の枝を逆さに引っくり返したような形の線を引いている。

男は明らかな猫類の特徴を備えていた。

（獣人だ。それも銀獅子の！）

ヨハンは思った。自分に話しかけてきたのはこの男に間違いない。二本足で立ち上がった獅子は、紋章として広く使われる意匠であるが、なるほど、迫力十分。太く力強い低音に見合った魁偉な容貌だった。

タテガミの頂点から足の裏まで、優に九スー（約225センチ）はあった。

男の押し出しに、ヨハンは尻の痛みも忘れて、思わず見入ってしまった。

全体的に大きな体の主であるが、特に頭部などは殊更に大作りで、雪白のタテガミを含めれば、ヒューマンの三倍くらいありそうだ。

動きやすそうな旅装束で、見るからに威力のありそうな大剣を担いでいる。一見して、いかにも手足れといった様子で、冒険者か傭

兵かといったところだろう。

「おい、どうしたね」

戸惑ったように獅子男は眉をひそめた。

自分にぶつかった拍子に転んでしまって、そのまま石畳に尻餅をついている少年が、ぽかんと口を開いて無言でじつと見つめてくる。そんな姿に不安を抱いたのだった。

こいつはいけねえ。頭でも打ってぼうつとしているんじゃないかな。実際には、ヨハンはただただ、見ほれていたただけなのだが、そんなふうには勘違いをしたのだ。

「立てるか？」

肩から下げていたズダ袋を下ろすと、空いた片腕をヨハンへ向けて「つかまれ」と差し出した。

「ありがとう……でも、大丈夫、自分で立てるよ」

ヨハンは顔を赤らめながら、早口に男の手助けを辞退した。

そして、慌てて立ち上がる。転んだ際に捻っいたらしく、右の手首が鈍く痛んで、小さく悲鳴が出そうになったが、これも我慢する。

男の気遣いには感謝したが、十四歳の少年らしい自負心が、それを素直に受け容れるのを許さなかった。子供じみた虚勢だとは自分でも思うのだが、生まれつきの性分だから仕方がない。それに、ぶつかったくらいで無様に転んだ自分に腹を立ててもいた。

「おお、男だな、坊主」

獅子は言った。少年のやせ我慢を見透かした上で、それを好ましく感じていた。

「……それじゃあ」

男の言葉に含まれる、薄いからかいの成分を、敏感に嗅ぎとったヨハンは、きまり悪い感情に追い立てられて、そそくさとその場を離れようとした。

「ああ、待て待て。そう急ぐこともないだろう。こうしてぶつかったのも何かの縁だ。道案内を頼めないだろうか。もちろん、急ぎの用があったりしたら、そいつを優先してくれて構わないんだが。ど

うだろう」

男が少年を呼び止める。腕を伸ばした拍子に、背に負った盾と剣の鞘とがぶつかりあってカチャリと鳴った。いや、形容するならグアギヤリッだろうか。

ヨハンはびっくりして、まじまじと見つめた。あんなに大きな剣と盾とを同時に扱えるのだろうか。そうだとしたら凄まじい膂力だ。「道案内？」

思わず鸚鵡返しに聞いていた。

「うむ。『巡る水車亭』という旅籠なんだが、知っているかい？」

言いながら、男はさきほど荷物を降ろしたはずみに緩んでしまった赤いマフラーを巻きなおす。

暖かそうな緋色の毛糸のかたまりが、白銀のタテガミと一体化して、もかもこと、なにやら妙な愛嬌がある。

「へつきし。しかし、どうにも、ここいらは寒くっていけねえ、アంతはそんな薄着で大丈夫なのかい」

「今年はまだ暖かい方ですよ」

大儀そうに洩をすすする毛玉に、ヨハンは少し毒気を抜かれて、くすりと笑った。

「そんなもんかねえ」

暖かい土地から来たらしい中年男は、今ひとつ納得のいかない様子で、ぶあつい手で大きな鼻を弄っていた。

ヨハンが思うに、もっと海に近い温暖な東部から訪れたのだろう。あるいは川向こうの西国の出身なのかもしれない。そこは、熱く乾いた土地だと聞いている。

「それで、話を戻すがな、旅籠だ旅籠。『水車亭』な」

「知って……ます。途中までなら」

実際、知らない住人はいないだろう。この街で二番目に大きい宿屋だ。そして、ヨハンの目指す目的地と方向も大きくは変わらない。

「助かる」

袋を抱えなおしながら、感謝の言葉を述べると、男はヨハンと隣

に並んで歩き出した。

「僕はディアロという。ディアロ・エウィンだ。坊主は何ていうんだ？」

ディアロと名乗る中年男のいかつい獅子面に、思いがけず人好きのする笑顔が乗っていた。

「ヨハン……です。ヨハン・クーケバツケル」

別に相手が名乗ったからといって応える義務もないのだが、その顔を見るうちに、いつのまにかヨハンも名乗り返していた。

するりと人の懐に入り込んでくる笑顔がある。この時のディアロの笑顔がまさにそれであった。

《水車の街》 アイレンベルク。

アイレンベルク辺境伯領の主都である。王国の中でも比較的北方に位置するこの有力な辺境伯領は、古くから製糸、製粉、水運事業によって栄えてきた川港の街である。

街の中央を貫いて流れるマリエッタ川（とその数多い支流）の恵みともいべき運河と、いたるところに設置された大小無数の街の異名の元になった水車が存在することで知られている。

同時にこの辺りは北西部有数の穀倉・農業地帯でもある。

近隣の荘園や自作農（地主）の元から運ばれてきた穀物を水力によって製粉する製粉場がいくつも存在している。

また亜麻の栽培も盛んであり、これもまた水車の力によって糸へと紡ぎだされる。

そして水によって作られた製品は、川船に載せられて下流の諸外国へと運ばれて行くのが通例であった。

まったく水によって活かされた国である。

同時に北方に勢力を持つメフテルと呼ばれる遊牧民がもたらす名馬や毛皮を、王国の中心部や、さらに遠く都市同盟まで輸送する交易の拠点であった。

一国・一地域から見た辺境とは、視線を少し引いて見れば、複数の地域を繋ぐ中心でもある。

古代帝国時代の防人の城砦に起源を持つとも言われる街並みは、南部・東部の都市が備えている柔らかな華やかさ、大らかな彩りとはまた違って、抑えられた色調の端整かつ硬質な石造りである。

いつそ無骨とも言いたであろつが、凜として良く整備されており、都市の並々ならぬ力を感じさせる。

たとえば街中に敷き詰められた石畳。古代からの物を補修して使っているのであるが、造られたばかりのように滑らかで、不恰好な割れや凹凸がほとんど見られない。

不断の手入れが行われているのだ。

その石畳の上を、ヨハン少年の先導で獅子男ディアロが歩いている。

道すがら二人は話し合った。

旅なれたディアロの話題は豊富で、なおかつ話し上手でもあったので、彼の語る異国の話に少年はすっかり引きこまれ、ディアロの目指す『巡る水車亭』が建つ中央市街地に差し掛かる頃には、ヨハンはこの中年男のことが、旧知の親友に抱くのに負けなくらい、とても好きになっていた。

「へー、それで、ディアロさんは市庁舎を見に来たんだ。わざわざパルマから」

「正確には僕がじゃなくて、相棒がだけどなー。オル……ああ、奴さんはオルランドってエルフなんだがな、芸術家気質つてのかな、芸術家気取りかも知れねえが、まあ絵だの像だのが大好きでよ、突然『アイレンベルクの市議会所蔵のレオンハルトの絵を見物する算段がついた』のなんのとやかましく。僕はまあ……つきそいみたいなもんだな」

運河を進む高瀬舟を眺めながら、ディアロは来訪の理由を説明した。

「つきそいなのに、その相棒さんと別行動なの？」

おかしなことだとヨハンは笑った。

「んー。言われてみれば、たしかにおかしいなあ。おまけに、良い機会なんで、儂はのんびりとこの二本の足でせつせと歩いてきたんだが、そいつはさっさと馬車で行っちまったからなあ。むむう、改めて考えたら、まったく友達甲斐のない奴だぜ」

憎まれ口を叩くと、わははつと豪快に笑った。

大きく鐘が鳴っていた。

マリエツタの抱擁　乙女の両の腕に護られた川中島の行政区から、風にのって流れてくるのは午後一時を告げる時報である。

音源は市庁舎に付属する大鐘楼。

そこに収められた　ザカリウスの装置　最新の機械式時計である。

盤上の剣が一時を指すと同時に連動した鐘が打ち鳴らされる。これは何年前か前、領主伯爵が、遠く都市同盟から職人を招いて造らせた物であった。

驚くべきことに、この複雑怪奇な機構の一切が、いかなる魔術的な助けを受けることなく動いている。

「こんなものが出回った日には、　僧院　の坊さまがたや、秘術師の先生がたは商売上がったりつてもんだ」

当時、市民たちはそんな風に噂しあつたものだ。

それまで時間をはかる道具といえば、水時計や火時計くらいしかなかったところに登場した精密極まる異国の装置は、それくらいに衝撃であった。

もっとも、最大の衝撃はその値段だったという冗談とも本当ともつかない話も付属している。そんな笑い話があることから分かるように、時計はアイレンベルクの富を象徴するものであり、実際的な面でも、正確な時間を知ることができるのは、商業の発展に寄与するとして、貿易に励む市民たちにはおおむね好評であった。

最後にもう一度、鐘の音は、ひときわ大きく鳴り響いた。

川面に波紋が広がるように、市内を満たした鐘の音が、そのままゆっくりと石壁や石畳の中へ、しみ込むように消えていく。

その石畳の上を、ヨハンが走っていた。

「もうこんな時間！」

ヨハンは焦った。ついつい旅人の話に夢中になっている間に、気付けば予定の刻限を大幅に過ぎてしまっていた。

そのディアロとは市街地に入って最初の三叉路で別れたが、心配はしていない、問題なく目指す『巡る水車亭』までたどりつけるだろう。

今はそれよりも自分の心配だった。一時の鐘が鳴った以上、昼の休みもじきに終わりだ。急がないと午後の仕事に遅刻してしまう。

旦那さんは寛大な人だから、少しくらい遅れたところで笑って許してくれるだろうが、それに甘えるわけにはいかない。

普段ならば近所の人々と二言三言挨拶を交わしながら職場へと向かうのだが、今日ばかりはそんな余裕は無さそうだった。

ヨハンは走った。あんまりに全力で走ったものだから、奉公先の『ダーヴィッツ商会』に着いたときには、冬だというのに額に大粒の汗がにじんでいた。

「どうしたんです、クーケバツケル君。そんなに急いで……ああ、いや、時間的にはいつもよりもちよつと遅いくらいですが。いえ、もちろん、遅れかけたから急いで走ってきたんでしょうとも。それは分かりますよ」

旦那さん。すなわち『ダーヴィッツ商会』の会頭アーネスト・ダーヴィッツは温厚そうな丸顔に怪訝な表情を浮かべた。

団子鼻にちよこんと乗った丸眼鏡の奥の緑色をした小さな瞳が、いつもより大きくなっている。

「いえ……な……でも」

荒い息を整えながらどうにかそれだけ言う。しかし、ダーヴィッツはそれでは納得しなかった。ヨハンが休憩時間の終了間際に駆け

込んでくるなんて実に珍しいことである。おまけに全力疾走の余韻に肩を激しく上下させている。

「そんな様子で、なんでもない、ということはないでしょうに」
質朴で仕立ての良い茶色い服に固太りの長軀を包んだヨハンの雇用主は、困ったように微笑した。

基本的に温厚で面倒見の良い男だが、悪く言えばお節介、過干渉だということである。加えて好奇心が強かった。無分別に根掘り葉掘り聞いてくるというわけでもないが、聞きたそうにうずうずとしている。これは説明しないと納得しそうにない。

（まったく、あれこれと知りたがるのは旦那さんの悪い癖だ。職業病だろうか……いや、単に物見高いだけだよな）

困った人だとヨハンなどは思う。悪い人ではないのだが、むしろ非常に尊敬しているわけだが、そろそろ四十の声を聞こうという年齢の割には、妙に子供じみたところがある。

このまま放置しておいて変にすねられても仕事にならない。また別にごまかすようなことでもなかったたので、仕事の準備をしながら、ヨハンが旅人とのいきさつを語った。

「母なる海、そして娘なる河川、わけても長姉たるマリエッタの大
河よ」

こんな呼びかけにはじまる詩がある。マリエッタ川に取材した、とある無名詩人の手になる詩だ。出来そのものは凡庸な詩であるが、マリエッタ川のありさまを巧みに捉えたその内容から、アイレンベルクの住民には昔から広く愛されている。

その詩の中で、春の憂いにマリエッタの乙女が沈み、涙をあふれさせるばかりだと詩人は言う。

融雪増水というものがある。遠くない将来、春が来て暖かくなる
と、冬の間山に積った雪が溶け出して来て、水量が増す。それを
詠ったものだ。

今はまだ穏やかに流れるマリエッタ川の岸边では、人足風の男たちが多数働いていた。増水による氾濫に備えた堤の補修工事である。人足たちを手配したのは『ダーヴィッツ商会』だった。

商会はいわゆる 斡旋所 である。

周旋人や口入れ屋などとも呼ばれるが、依頼人と労働者との間に立って仕事の仲介を行う業種だ。一般に冒険者への依頼斡旋業が有名だが、アイレンベルクでは、このように市議会の委託を受けて護岸工事の為人足を手配することもしばしばあった。

「なるほど、順調に運んでいるようですねによりです。この分ですと予定よりも早く工事終了できそうですね」

現場監督の報告を受けて、ダーヴィッツは、眼鏡の奥の小さな瞳をいっそうに細めて笑うと、満足そうにうなずいた。会頭の後ろに秘書よろしく控えたヨハンが二人の会話の要点をメモしていく。実際に現場を指揮するのは、目の前に立つドワーフ族の現場監督だが、ダーヴィッツはこまめに現場を視察するようにしていた。

「ええ、今年は例年よりも雪が少なかったおかげで工期が延びなくてすみそうですね……っと」

そんな監督の言葉を裏切るように、天から白いものが降ってくる。「おや、言っている間に雪が降ってきましたね」

「やれやれ、口は禍の門て奴ですか。ただまあ、この程度の雪ならば支障はありませんや……連中、むしろ身体を暖めようっていっそうに動くかもしれないくらいだ」

肩をすくめる小人の冗談に、ダーヴィッツは軽く笑い返した。

晴れた日に風もなく降る雪を風花と言う。天空神系の祭礼で多用される、川流しの紙吹雪のように、小さな雪の粒が川に落ちる。

粉雪だ。土手に焚かれた火が辺りを照らし、影法師をいくつも作る。

白い斑点が一瞬だけ浮かんで、次々と流れに吞まれ、溶かされて消えていく水の面を眺めながら、ひとり言のようにダーヴィッツが呟いた。

「さて、そろそろ魚の美味しい頃ですかねえ」

茶鱒を初めとした、これからの食卓を飾る淡水魚に想いを馳せる。炒めても良いし、薫製も良い、蒸し焼きにするのも捨てがたい。

「そうそう、卵も忘れちゃあいけません。この時季に勝手に釣りに糸を垂れると漁撈組合に叱られますが、あれなんて、実に大きくって、食いでありそう……っと、残念、魚かと思いましたが、どうも違いますね。はて、火影でもないし」

最初、それは揺れ動く火の影が川面に投げかけられた物かと思われた。

だが、そうではなかった。魚影ではありえない大きな影が現れたかと思うと、二つ、三つ、六つと瞬く間に数を増していく。

川底で何かがつこめいていた。

にわかに不穏な空気が流れた。人足たちが騒ぎはじめる。ダーヴィッツが指示を出して、人足たちを川から離れさせようとした途端、川の中から奇怪な影が飛び出してきた。

「メロー？」

ヨハンは、そして人足の一部が同じ勘違いをした。彼らには、最初、それが、アイレンベルクの市内にも数多く住む水圏の民、人魚の一族かと思われたのだ。

けれども、その姿はメローと聞いて連想される形よりも、なお一層に不気味で、人間離れしていた。一言で形容すれば、二本足で立つ鱗の生えた蛙人間だろうか。背中には退化した羽めいた器官を備えている。

「いや、違う……けども、馬鹿な、サムヒギンだって！」

ダーヴィッツが動揺も露わに叫んだ。彼の知識に合致するものがあった。

サムヒギン・ア・ドゥール。アイレンベルクからは遙か遠くの大洋の果て、深海底に棲まうとされる海の妖魔の一族だ。フーアやムーリヤルタツ八などと呼ばれることもある。

しかし、彼らが人類の文明圏、それも海から遠く離れた内陸部に

現れるなどと聞いたこともない。ダーヴィッツ自身、これが他人から聞いた話ならば「あり得ない」と断言し、一笑に付したことだろう。

啞然として一瞬対処が遅れた。

「旦那さん……！」

(おや、この叫び声はクーケバツケル君だな)

絶望的な悲鳴に我に返ったダーヴィッツが見たものは、自分へと向けて繰り出される大槍の、三叉に分かれた矛先だった。

(……あ、これは死んだかな?)

自分でも呆気ないほど何の感慨もなくそう思った。覚悟を決める間もなく槍は自分を貫くだろう。残念ながら、痛いでは済みそうもない。

まるで他人事のように冷静に分析していた。

銀光が走った。同時に鈍い音が轟いて、それから少し遅れて、落下した鑄鉄の看板が地面を叩いた時のような音が響いた。

ダーヴィッツは異音に身をすくませている自分に気づいた。

自分？ 音に戦慄おののき、死に恐怖している自分。死に刈り取られるはずだった意識。だというのに……生きている！

死はやってこなかった。突如身近に迫った死の影は、また唐突に遠ざかった。

死への恐怖よりも突然の大音響にびっくりして、思わず閉ざしてしまっていた眼をダーヴィッツが開くと、視界に大剣を抜き放った銀毛の獅子がいた。足下には妖魔の屍骸が半ば両断されて横たわり、少し離れた場所には槍の残骸が落ちている。

獣人が手にした大剣で力任せに弾き飛ばしたのだろう、槍は柄の部分から捻じ曲がっていた。

「……助かったのですか……どなたかは存じませんが、感謝を」
混乱するのは後である。湧き上がってくる諸々の疑問を意志の力で捻じ伏せると、ダーヴィッツは事態の把握に努めた。

川の中から突如出現した妖魔の軍勢……とまではいかないが、一

匹や二匹ではきかない数の、本来は海に属する怪物に、これまた唐突に現れた獣人の戦士。それに庇われて立っている自分とヨハンと監督を、少し離れて人足たちが取り巻いている。

実際、よく分からない状況だった。

まず、この銀色の獣人が自分を助けてくれたのは間違いないだろう。加えるに、男が妖魔の群れを牽制してくれているおかげで、ヨハンや人足たちへの被害もまだないようだ。また、混乱して大惨事を引き起こしていてもおかしくない人足たちが、武人の気迫に呑まれているのも幸いであった。

この危うい均衡が崩れる前に、彼らを早く避難させなければなるまい。

「見ず知らずの戦士一人に盾役を押し付けることになりませんが、今は彼に頼るしかありません。監督、クーケバツケル君。我々は人足の皆さんを連れて避難しなければ……クーケバツケル君？」

二人に声をかけようとして、ダーヴィッツはヨハンの様子がおかしいことに気付いた。

「ディアロさん！」

ヨハンが叫んだ。救いの神こそ誰あるう、少年が、昼間出逢ったディアロだったのだ。

「うん……おー、ヨハンかー。奇遇だな！」

ちよつとした買物先で知り合いに出会ったような気楽さで、ディアロはヨハンに笑いかけた。声からは無数の怪物と対峙しているといった緊張感はまだ感じられない。しかし、けして侮り、油断しているわけではないことが素人目にも判った。突破しようとする妖魔が現れるたびにそれを牽制……を通り越した痛手を与えて退かせる。

「がっはっは。こりゃあ、見苦しいところは見せられねーなあ」

獅子は吠えるように笑った。それから、ちよつと顔を引き締めるのと、ダーヴィッツに要請する。

「アンタが責任者だな。避難までの時間は稼ぐんで、慌てて転ばな

い程度に急いでくれ」

願ってもない申し出だった。ダーヴィッツは速やかに肯いた。

「お礼は後ほど……貴方もあまり無茶はされませんように。聞いている通りです、皆さん、我々は後退しますよ！」

人足たちはそれによく応えた。先頭にたつて誘導した現場監督の手腕もあるが、地域の顔役であるダーヴィッツが、彼らに信頼されていたのが大きかっただろう。目立った混乱もなく、堤防からかなり離れた所まであらかた避難を済ませた。

「貴方も早くお逃げください！」

身を挺して自分たちを逃がしてくれた戦士の方へと向き直り、ダーヴィッツは大声で呼びかけた。そして、信じがたいものを目撃した。

「……え？」

目を疑った。

人足やダーヴィッツたちという足枷が無くなった瞬間。「足手まといが居なくなったら、ようやくこれで本気が出せる」とでもいうのか、獅子の戦い方が変わった。

それまでの防御主体の戦い方から、それでも随分と攻撃的な「攻撃は最大の防御」という古式ゆかしき金言を実践する戦い方であったのだが、ここにいたっては、もはや防御する気があるとは傍目にも思えない、熱狂的な戦いぶりだった。

それでいて、無茶苦茶な戦い、無分別な蛮勇が持つ見苦しさ、泥臭さを感じさせないのは、男の剣腕が卓絶した物であることを無言の内に主張していた。

剛力に任せて振るわれた大振りの一撃で、数匹が纏めて薙ぎ払われる。

もちろん、いかに男が肉体的に恵まれた獣人だとはいえ、腕力だけではこうはいかない。引くべきは引き、押すべきは押す。足を捌き、体を捌き、要所要所に巧みなフェイントを織り交ぜ、力を効果的に使っているからこそだ。

縦横に大剣が振るわれる。緩急自在の攻また攻。鈍い金属光が閃くたびに妖魔が倒れる。鉞で枝を払うようだ。

獅子は吠えた。

戦場を支配する威武の叫び。音高く激しい剣戟の響きさえもそれに譲った。元より岩のような巨漢である。それがさらに二回りも三回りも大きくなったように思われた。

とてつもない迫力である。大きく離れた場所に立つダーヴィッツたち守られている者ですら、思わず威圧され、震えたのだ。敵として直面する者の恐怖はどれほどであっただろうか。恐るべき強敵の出現に、妖魔の群れがざわめいた。

ディアロは眼をぎらぎらと輝かせ、敵を睨みつけ、歯をむいて笑った。

思わずあとじさった海魔の兵团　もう随分と数を減らしていたが、その中の一匹に狙いを定めると、突風のように走った。

戦場の混乱をも断ち割る勢いで、ぶうんつと風を斬って剣が振りぬかれた。

速く、鋭く、そして高く！

青光一闪　疾風迅雷。

火焰乱舞　銀獅子吼。

斬り、打ち、突いた。暗い血が戦場の空を舞った。瞬く間に妖魔の群れが蹴散らされていく。

だが、ふと、ある所でディアロが顔をしかめた。「しまった！」と今にも叫びそうな表情であった。あるいは、あまりにも軽快に蹴散らせる物だから、戦士は調子に乗りすぎたのかもしれない。一匹の妖魔を吹き飛ばしたが、勢いあまって剣先が高く跳ね上がりすぎたように思われた。

それを好機と見たのか海妖が秀逸な連携を見せた。まばたきほどの間隔を入れて、左右から連続して槍を繰り出した。

しかし、ディアロ・エウインはやはり熟達の戦士だった。にやりと笑う。双方向から突き出された槍を　隙と見えたものこそ誘い

だったのだ。片方は返しの刃で切り払い、もう一方は大盾で受け止める。

まともに入れば岩をも打ち貫いたであろう、奇怪な魔力によって招かれた水流を纏った一撃であった。それを軽く受け止めて小揺るぎもしない。

どころか半歩前に踏み込みながら、盾をグツと突き出して相手の体勢を崩し、盾の側面に打ち付けられた補強用の縁金具で頭蓋を叩き割りさえする。

その不快な、しかし蛮性を刺激して止まぬ感触に、いつそう高く銀獅子は吠えた。

もはや大勢は決していた。

ついに、ひときわ高い断末魔の悲鳴が上がった。

ディアロの振り下ろした剣が、最後の水妖を斬り伏せたのだった。

戦闘の終結を見届けて、ダーヴィッツは知らず知らず肺の奥に溜め込んでいた息を、ようやくのことで吐き出すことが出来た。そして、ふいに、こことは別の場所にも上陸した妖魔たちが存在する事に気付いた。

街のあちらこちらで戦闘を行う音が聞こえてくる。

獅子と少年（後書き）

2011.09.08（木）

ディアロがやってきた街を「パツフェルベル」から「パルマ」に変更。

解説

元々、とあるTRPG（およびWEBゲーム。『パツフェルベルの鐘』）の二次創作として書き始めた物でした。

その時、拠点となっていた街が「パツフェルベル」でした。

その後、書いていくうちに妄想が膨らみ、「独自の世界にキャラクタとストーリーラインだけ移して書き直そう」と思い立ちました。

その際、（一応理由があつて）都市の名前も「パツフェルベル」から「パルマ」に変更していたのですが、それを反映し忘れていました。

ちなみに、ディアロは仲間のPCで、相棒として言及されるオerlandが筆者のPCでした。

百鬼夜行 1

飛来した矢に胴を射貫かれた馬が断末魔のいななきを上げた。

駆け足の名残で数歩を進んだところで、ぐずりと崩れる。

液状の身体を持つ怪馬であった。赤い血の代わりに、ちょうど翡翠と緑青の間の色をした水が飛び散り、はらわたの代わりに、茶色い砂利めいた質感の巻貝と淡水性の川藻の緑とが撒き散らされる。散乱する馬の残骸が、宿の軒に吊るされた螢火燈の淡い光に照らされて仄白く光る石畳を汚した。

水棲馬だったのだ。

「ケルピー……とはな。奇妙を通り越して、もはや異常だな」

いつでも撃てるよう二の矢を継いだ体勢で、宿のバルコニーに立ちながら、オルランドはどこか呆れを含む表情を浮かべた。

先ほどまで眠っていたのだろう、寝乱れ髪に、物を射るのに適しているとは言いがたい、ゆったりとした寝巻き姿である。

街を徘徊する奇妙な気配を察して飛び起きたのである。と行けば、勢い神秘的な感じがしたのだが、なんのことはない、実際は夜中に尿意を覚えて起きだしたところに、馬匹のいななきと馬蹄の轟きを聞いたのだった。

「はて、こんな夜中に街中を駆ける馬とは、急を知らせる早馬か何かか」

野次馬根性を出してバルコニーに出たところで、石畳を駆け回るケルピーと出くわした。妖精族の男はぎよつとした。水辺に棲み、たわむれに人を水中に引きずりこんでは内臓を食い散らかし、時に人の死を預言するという恐るべき幻獣である。泣き女バンシーや愚か火などと同じく、沼沢河川に親しみ、水辺を代表する妖怪として知られている。それまで幾らか残っていた眠気が一気に飛び去った。前後の状況は不明であったが、どう考えても人里においてよい種の獣ではない。

「否。いかにあの妖馬が早瀬に現れる存在だとはいえ、そしてこの都市が川の街だとしても、人里に現れるはずがない」

夕刻のサムヒギン騒動に続き、今度は街中を徘徊するケルピーである。所属する場所を比べれば（一方は海水の属であり、もう一方は淡水の属である）、少し近づいたと言えなくもないだろうが、それにしたところで普通は街中に出るものではない。それが現れたのだから、明らかな異常事態であつただろう。

我が事ながら乱暴だとは思つたが、怪我人や死亡者が出る前に仕留めておいた方が無難である。

そして、速やかに射抜いた。

「この分では、次あたり悪霊や幽鬼の類でも出かねんが。こいつは百鬼夜行の先触れか、はたまた仙境か魔界と道が交差してもしたか」
いつでも二の矢を放てる体勢を保つたまま独りごちる。

「そういえば、この街に入つて最初に道が分かれる所は大きな三叉路だったが、さてはそこから入り込んだか？」

南大門を入つて最初の三叉路を越えて、真つ直ぐに街路を突き進めば、ちょうどこの宿につきあたる。

もちろん普通の旅人や商人を当て込んでの物であるが、怪物にとつても突き進むのに良い立地であつたと言う事なのだろう。

岐路 すなわち道が分かれ、また同時に交差する所には人と物の流れが集まり、たまる。それは魔術的な意味でも同じくある。人が岐路に立つように、精魔は岐路に舞い踊るのだ。

そのような場所には、『善き淀み』たれという願いを籠めて、道祖神として 水の精霊 の祠堂が建てられるのが通例であつた。

考える間に数分が経過した。片目を閉じ、唇を舌で湿らせる。風の吹く音が聞こえるばかりだつた。

じつと、崩れ落ちた水の妖馬の残骸を見下ろしていたオルランドであつたが、もはや動きだす気配はないと判断して、すつと構えを解いた。結局放たれることのなかつた二の矢を 施した威力強化の呪いも解いた上で 矢筒に戻し、弓を下ろす。

「なんにせよ、このまま放置しておくわけにもいくまいで」

放っておいてもどのみち発見はされるだろう。夜警が訪れるのが先か、それとも朝になって宿の人間が発見するのが先かはわからないが。

とはいえ、残骸から水棲馬を推測できるかは疑問である。

現場に残るのは、水と泥と貝と川藻に汚された一本の矢。そこだけを見れば実に不可解である。

しかし、理由はわからなくても矢と自分を結びつけるのは容易であろうと思われた。なんとなれば、宿の真ん前の街路に矢が突き立ち、当の宿屋には弓矢を持った余所者が宿泊しているのだ。

男は自分の事を善良な市民だと考えているので、その時になって色々と勘ぐられるのは、想像するだに気分が良くない。

要らぬ誤解を避けるためにも、まずは宿の人間に事情を説明し、なるべく早く市庁舎か、あるいは都市衛兵の詰所か、しかるべき当局に報告するべきだろう。

そう判断すると、寝間着から外出着に手早く着替え、さらにその上から武器を帯びる。

戦闘用の丈夫な革服を着込み、籠手をはめ、大小二振りの剣エルフの非力でも扱える小剣と受け流し用の短剣を佩く。少し考えて弓矢は置いていくことにした。高所から射るならばともかく、街中で弓は使いにくい。

夜中とは言えわざわざ武装して街に繰り出すなど、普段なら考えられない話だが、今は普通の状況にあるとは言えない気がした。

「まったくもって難儀な事よ」

準備万端整えて、かすかに苛立ちをこめてヒゲをさすった。あまり愉快でない事態にならないと良いのだが。

「ああ、それに便所にも行かなければならないな」

そしていささか間の抜けた声で呟いた。

少し緊張が解けたのだろう。すっかり忘れていた尿意をいまさらに思い出していた。

百鬼夜行 2

さながら話に聞く水底の寺院の趣きだと思われた。

淡い月明かりに照らされる街並みは、強く荘厳な印象を与えた。

そして夜霧は流れる波のようだった。

静かだ。妖魔騒ぎの影響もあるのだろうが、昼間の陽気な喧騒が、遠い異国のことのように思われる。

なによりも水の世界を思わせるのは、魚たちの奇妙な振る舞いだつた。

瓜類の皮の網目のように街中を走る水路から、ふわりと空中へ無数の魚が跳び出し、そのまま霧の中へと泳ぎだしたのだ。

薄い月の光を受けてきらきらと鱗が光るさまは、夜行性の蝶にも見えた。

「もしくは森の妖精竜フェアリー・ドラゴンか。しかし、魚が空を飛ぶなどとは……いよいよもって奇天烈な。南の海には水中を泳ぐ霊鳥がいると聞くが、それはもしかこのようなものであるうか」

船乗りたちから聞いた眉唾物の　なにせ、鳥が海中を泳ぐといふのだから、馬鹿馬鹿しいにも程がある噂話が思い出された。

そのうちに、ふとオランダは気づいた。先刻よりもさらに魚の数が増えている。

それもこんな北国の川に棲んでいるはずがない色鮮やかな種類の魚たちまで泳いでいた。

頭上や肩の辺りを泳いでいく魚を目で追っていると、まるで自分がメローにでもなった気分だった。もつとも魚たちがそうするように、宙を泳ぐ事まではできなかつたが。

異常極まりない状況であるということさえ考えなければ、詩人が譚るイスの都を巡る一連の歌物語のような幻想的な美しさであっ

た。

オランダは四方を見回し、最後に頭上を見上げた。そちらにひとときわ巨大な気配を感じたのだ。

そして絶句した。

「勇魚クシラだと……！」

海竜にも擬せられる、黒々としてなめらかな皮膚を備えた、小山のような体軀を誇る、偉大なる魚の王だった。

「それに海蛇のたくいに幻影を吐く巨大貝の化物、そしてあの平べったいのは確かエイとかいう怪魚の一種だったな」

以前に図鑑で読んだ怪物だ。挿絵として添えられていた細密画が非常に見事な物であったので、それで特に記憶に残っていた。

この期に及んでは、流石に薄ら寒くなってきた。このまま進んで行きつく先には、果たしてどれほどの事態が立ち現れるのだろうか。クラーケンやら、それこそ本物の海竜やらが待っていないとも限らない。

あるいはそれ以上の驚異か。

エルフは少しだけ後悔を覚えはじめていた。持ち主の落ち込んだ気分を反映して、細長い耳がかくつと下へと伏せられる。

自分がこの事態を收拾できるなどは元より思っていなかったが（するつもりもない）、衛兵に報せたところでどうにかなると思えなかった。

衛兵の詰め所などに向かおうとせず、もつと言えば夜中に起きだしなどしなければこんな奇妙な事態に巻き込まれずに　より正しくは、気付かないで済んだのではないかと思われたのだ。

だが、すぐに首を振った。知らぬ間に後ろから鮫に食いつかれるよりは遙かにマシだ。

そんな風に考え事をしていたので、気付くのが遅れたのだろつ。
気づけば街のあちらこちらからの物陰という物陰から、害意に満ちた視線を感じる。

迂闊だった。

オルランドは内心で盛大な舌打ちをした。いつのまにやら怪物の群れに取り囲まれている。

何匹……いや、何百匹だ。それは数えるのも馬鹿らしいほどの数だった。絶望的と言っていい。冗談でも「全てを斬り捨ててやる、耐え切つてやるぞ」と豪語する気にはとてもなれない。

怪物たちは明確な殺意を示していた。このままでは死は免れまい。武術の心得こそ有ったが、相棒のディアロと異なり、オルランドは生粋の戦士ではなかったし、死生の境にふらふらと片足で立って喜ぶたぐいの酔狂者でもなかった。

血の気は失せ、膝から力が失われて、崩れ落ちそうになる。恐ろしかった。

だが、ここで倒れていても仕方がない。己を叱咤して、どうにか生き延びる方策を考える。

方策といつても何か起死回生の秘策をおいそれと考え付くようなものでもない。どうにかして振り切つて、建物の中へ逃げ込むくらいしか思いつかない。

ならば、どこが相応しいか。隙を見せぬよう慎重に歩きながら考える。

（素直に当初の予定通り衛兵の詰所へと向かうべきか……いや、それはまだ、大分距離があるし、それにそちらへ続く道には化物どもの気配が濃厚だ）

かと言って宿に逃げ帰るにも進み過ぎた。宿自体、構造的に籠城に適した建物ではなかった。

(こうなれば駄目で元々、このような怪異には精霊に縋るのが一番だ)

数日前からこの街に滞在しているので、ある程度の地理は分かっている。

精霊の園生。 精霊 を祀る社へと向かうことに決めた。この街に加護を与える祭神は 水の精霊 である。

そうと決まれば時間が惜しい。それに、ぐずぐずしては恐怖が募るばかりで、動き出せなくなりそうだった。

覚悟を決める。呪句を唱え、靴の呪力を解放する。

息を整える為に大きく深呼吸をすると、オルランドは剣を抜放ち、^{とき}関を発して考えられる限りに最短の道へと向かって駆け出した。

逃走劇が始まった。

激しく剣が振るわれて、怪物の爪牙がそれを受けとめる。

剣戟の音。

逃げ走る靴音とそれを追う者たちの足音。

逃亡者には石畳を走る他に道がなかったのに、追う怪物たちは自在に空中を泳ぎまわっていた。

けれど、それを理不尽だと感じる暇もなかった。

頭上から降って来た一撃を、からくも転がって回避する。転がりながら、周囲一帯の足を払う。咄嗟に化け物が宙へと飛び逃れ、オルランドはその隙間へ強引に自分を押し込むと、前転の勢いを殺さぬように飛び起き、走った。

元より倒そうという意思はない。男が考えていたのは牽制程度に攻撃し、怯ませた隙にそこを全力で突破することだけであった。

だというのに、生来の俊足に加えて、歩みを速める妖精族の靴の力で加速された、速さにおいて比類ないこのエルフが、本気で逃走を試みて、それが叶わない。

やはり、無謀な試みだったかと心が挫けそうになった時、ふとエルフの長耳に、美しい歌声が聞こえてきた。

どこまでも美しく澄んだ、清水に満たされた硝子の水差しを、ポンツと弾いたような声だった。

どこか子守唄を思わせる歌声は、よくよく聴くと 精霊 を称える祝詞であった。

そして、祈りの聖句が近づく程に、怪物たちの攻撃が弱まっていた。
く。

「しめた！」

オルランドは全霊をこめて声の方へと駆け出した。エルフの一族の長い歴史の中でも、これほどの勢いで走った者はそんなには存在しないだろうという凄まじい逃げ足であった。

そして、いくらも経たないうちに、目当ての一団と行き当たった。それは僧団であった。そしてまた軍団であり、演団であり、楽団であった。

ひとときわ高らかに歌う尼僧を中心に、高度に装飾的な楽器を兼ねる儀礼用の刀杖槍旗を携えて舞い踊る、六人の僧兵に護られてゆったりとした僧衣を纏う水神の僧衆が、聖句を唱えながら、左手に持った水盆から、右手指に聖水をつけ、それを振りまきつつ歩いて来る。

歌がやみ、怪物の群れは去った。

「夜の終わり、朝の始まり^{あした}。絹の糸の羽を持つ、時告げの鳥が高く鳴く。目覚めは近く、夢見の時間は終わりです」

祈りを終えた水霊の王の尼僧は、法悦の忘我から未だ帰らぬ様子で、誰に言うともなく呟いた。

それは小さな囁き声であったが、聞く者の耳を、奇妙に刺激する不思議な響きを持つていた。

首筋を女の柔らかな手で撫でられたような気分だった。

その性質　声質は確かに　聖　だろう。

だが、聖歌の余韻にひたる熱っぽく恍惚とした口調には、無垢よりは艶冶という形容がより相応しい。

それ自体が歌の続きのようで、まるでシレーナに魅入られたようだと思つた。

声麗しいメローの中でも、ごく一部の限られた者のみが備える呼び声　である。

不快ではないが、無闇と昂揚させられるようで、男が居心地の悪い思いをしていると、ふいに尼僧がエルフの方を向いた。

ようやく　神の国　から魂が戻ってきたようであった。

立ち往生を思わせる微痙攣を伴った硬直が解かれ、ぼうつとして虚ろな闇の深淵を覗かせるばかりであった尼僧の瞳に、力強い水色の光が灯った。

「もし、そのお方。一人の夜歩きは危険ですよ。もし夜盗と出くわせばどうします。明け方に近いとはいえ、このような刻限にどうされましたか、散歩にはいまだ早いかと思われませんが」

そして、一、二度僧衣のひだを整え、裳裾の乱れを直しながら、僧団に混じり周囲を警戒する見慣れぬエルフに向かって、そんなとぼけたことを聞いた。

聞かれたオルランドが呆れたことに、どうも本気で言っているらしく、はぐらかしている風でもない。

鈴音を思わす声の美しさに変わりはないが、そうたずねる声からは、先ほどの熱狂の名残は欠片ほども見出せなかった。

夜の夢

「夢 ですか。アビゲイル司祭、貴女はこれが夢だとおっしゃる」
「その通りです」

驚きを含んだオルランドの問いを、 精霊 に仕える尼僧はあっさりとした口調で肯定した。

魚鱗を思わせる光沢を放つしつとりとした水色の髪、藍瓶あいがめを覗いたような魅力的な水色の瞳、中でも一際目を引くのは、異種族ならば耳にあたる箇所から生えた、ひれを思わせる装飾的な突起だった。それら一群の、種族に特有の形質から明らかのように、魚の類の特徴を備えた水の妖精メローの一族である。

彼女は自らを クリコ水霊院 の詠唱師アビゲイルであると名乗った。

アビゲイル・イリイニシナ・ポラニスカヤ女司祭。

「それは、つまり、我輩は実は眠っていて、貴女がたは夢の中の登場人物であるか？」

戸惑ったようにオルランドは重ねて問いかけた。

それでは、自分は今でも宿の寝台の上で、温かい布団にくるまっているとでも言うのだろうか。こんなにも朝まだきの冷たい風を、総身に感じているというのに。

「あるいは、あなたが私の夢の中の登場人物であるかも」

そう切り返されてオルランドは一瞬鼻白んだように言葉に詰まったが、すぐに水色の女司祭の目に宿るからかいの色に気付いて、苦笑いを浮かべた。

「冗談を、司祭殿」

「あら、今のは確かに冗談ですが、夢 だというのは冗談ではありませんよ」

すべて、本当の話です、と司祭は笑った。

「なるほど。よしんば、冗談ではなく、真実、夢であったとしてももちろん、貴女のような美人とご一緒できるのは、夢の中でのこととはいえ嬉しいし、夢に見ていただけならば男として光栄ですが、このような夢を見る理由が思いつかない」

言いながら、オルランドは、苦笑の色を深めた。

自分がまるで聞き分けのない子供にでもなったような気がしたのだ。

「お上手ですね」

世辞と取ったようだが、その割りに嬉しそうに司祭は微笑んだ。

「ですが、これはやっぱり 夢 なのです」

穏やかに、しかりきっぱりと尼僧は言った。

「けれども、オルランドさんが誤解されているような、あなたや私が見た夢でもありません。人の夢にこのような力はありません。夢見ておられるのは 精霊 あるいは 悪魔 どちらであるのか判りませんので仮に 精魔 と呼びましょう」

そこで一度言葉を切り、指で聖印を結んだ。

「ええ、そうです、私たちは現実に存在する人の類です。ですが、同時に、その方を見る 夢 の中の登場人物でもあるのです。いえ、より正しくは背景でしょうか」

「背景？」

「路上の辻芝居で、蟻や草に注目することはあまりないでしょう」

それだけの隔絶が存在するとアビゲイルは考えていた。

同時に、だからこそ、こうして自分たちは自由に動いているのだらうとも。

「今現在、このアイレンベルクという都市そのものが、その方の夢 と一体化しているのです。と言っても、実は私も完璧に理解しているわけではないのですけれども…… ああ、そんな胡散臭そうな目をなさらず。それは、私も不思議には思います、ですが、常識ではかされる事態ではありませんし、悪夢のようであると思われませんか？」

最後の一言は、まるで論理的な意見ではないが、それがかえって奇妙な説得力を生んでいた。

「ふむ」

オルランドはしばらくの間思索した。怪物の群れが消え去った以上、もう差し迫った危険はない。

納得できたわけではないが、ひとまず最後まで聞いて、それからゆっくりと考えれば良いだらう。

最早、頭から否定する気はなくなっていた。

「悪夢のようだとは思いますが、悪夢そのものだとは思えませんな」

「ええ、夢ではありませんからね、巻き込まれる私たちにとっては、どこまでも現実です。あくまでも、夢見ているのは 精魔 であり、その方が見られた 夢 が、現実に影響を与えているのですから。一部の先鋭的な神学では、この世の全ての事象は、宇宙の中心に坐す 造物主 が、まどろみの中、夢見たことの投影に過ぎないと主張されますが、それは極論であるとしても、ゆえなきことではありません。

神々は世界を書き換える力を有している。

「それが 神 ならぬ 精霊 ないし、かつての権能の残照を幾ばくか残す 悪魔 であるとしても、方々の掌る 規範 ありきで 物質 があり、また 物質 が移ろいやすいものである以上、物質 から成るこの世界はその影響を免れえませんが」

「いまいち、その種の思索には疎いもので、理解の及ばぬところがあります。人ではないものの 夢 が人の現実に影響を与えることがあるというわけですな。伝承上の《華胥国》や《幻夢郷》のよくなものか。そして、その 精魔 が怪物を……いや、実際の数としては、怪物よりも魚の方が多かったか、さしずめ、その怪物や魚を含めた 海 を夢見たというところですか」

「正確には、河川や沼沢を含めた水界全般のようですけどね」

オルランドの呟きに、アビゲイルが多少の訂正を入れた。それは大筋での肯定を意味していた。

「ああ、なるほど。そういえば、我輩が最初にお目にかかったのは淡水性のケルピーであった。言うなれば、水底の夢というところですか」

オルランドは目をみはった。色々とあって、すっかり忘れていた

が、その通りだ。確かに海だけではないらしい。

「言いて妙ですね。結局のところ、水であることには変わりなく、海と川は繋がっていますからね。女王にいたっては、霧雨の水滴や地下水をも含めた水と言いう水を支配される御方ですし」

そこまで行かなくても、高位の精魔の視座に立てば、海と川の違いなどあるまい。

「先ほども言いましたように、果たしてこの方がどなたであるのか、までは解かりません。感触としては水の根源に近い方、我らが女王の偉大な眷属か、かつてそうであった大悪魔であるかとは思いますが、残念なことに、私どもクリコの院の記録に、該当する精霊悪魔はおられませんので。ただ、一つ言えるのは、善き方ではありませんが、けっして悪しき方でもないということです。善悪などではなく、もっと根源的かつ原始的な衝動に律されたお方です」

「では、悪意を持って怪物を振りまいているのではないと？」

「はい。その方は本当に、ただ夢を見ておられるだけなのです。かといって、そのまま放置しておくわけにもいきませんし。せめてより深みへとその眠りを誘い、夢の活性化をすすめようとこうして夜毎、子守唄をうたって回っているのです」

では、最初に感じた子守唄という印象は、間違いではなかったわけだ。

「では、今日はひとまず、完全に眠りについたわけですね」

怪物が消えたのはそういうことなのだろうと考えた。だが、アビゲイルは、それを否定する仕草を行った。

「いいえ、いいえ。私どもに、そこまでの力はありません。そつと

機嫌を損ねないように干渉し、夢見の頻度を下げる程度です。ただ夜明けが近づいて、夢を見る事をやめられただけなのです。人だってそうでしょう、普通、夢は夜に見るものです」

「いや、しかし、それでは、腑に落ちないことが一つあります」

なるほど、と納得しかけたが、それだとおかしなことが出てくる。

「わかります。オルランドさんが言われるのは、昨日の夕方に現れたサムヒギンたちのことですね。あれはとても奇妙なことです。まるで道理に合いません。私たちは危惧しています。そこに何者かの作為を感じずにはいられません」

衛兵 1

ここで少し時計の針を戻そう。

オルランドが尼僧アビゲイルと出会った払暁を起点に、ちょうど短剣一周分、十二時間ほど前の話だ。

ディアロ・エウインが海魔サムヒギンの群れを蹴散らした頃である。

怪物が出没する直前に降りはじめた雪が、少しずつ勢いを強めてうつつすらと積もり始めていた。

危機を脱し、ほつと息を吐いたダーヴィッツは、しかし、すぐにまた、はつと息を呑んだ。

遠くから、近くから、街のあちらこちらから、剣戟の響きと怒鳴りあう声とが聞こえてきたのだ。

「旦那さん」

ヨハンが緊張に蒼褪めた表情で言った。

ドワーフの監督や人足たちも一様に固い顔付である。

空気が強張っていた。

逃げる中でずれた眼鏡を直しながら、ダーヴィッツは、不穏な音の聞こえる方へと顔を向けた。

見える範囲では何ら異常は無かった。常と変わらぬ街並みが広がっている。

けれど、それが一層、想像を剣呑な方向へと急き立てた。

苦い物がこみ上げてくる。錘を呑んだおもじような不快感。

これはやはり……。

「どうやら化け物どもが現れたのは、ここだけじゃあないらしいな」
急ぎ足に近づいて来たディアロが、ダーヴィッツらに声をかけた。
一同、思わずひるんだ。
だが、それも無理はない。
近くで見ると改めて気づくが、この人獅子はやはり並外れた大男である。

人里に現われる事も稀な熊人や巨人族を別にすれば、ディアロのような大型の猫類の獣人は、最大の種族の一つであるが、その中でも頭一つ抜けているだろう。

この中では二番目に長身であるダーヴィッツなども、ヒューマンとしては背の高い方なのだが、なおニスー（約50センチ）は縦に長い。横にいたっては倍以上だ。

それに、ヨハンなどは昼間の出会いからディアロに好印象を持っているが、他の者からしたら、恩人だとは分かっていても、何処の誰とも知れない相手だというのもある。

それが、犠牲者の体液を未だ滴らせる抜き身を手に、表情こそ柔和な物であったが、返り血に染まって、ところどころ赤と銀の斑になったタテガミをなびかせ近づいてくれば、動揺しない方がおかしい。

遅まきながら、ディアロもそれに気づいた。

（あー。まあ、あれだな。想像するに、竜蛇の手合に囲まれて絶体絶命と覚悟した所へ乱入してきた霜の巨人が、そいつらを斬り殺した山刀片手にニヤニヤ笑って近づいてきたってな所か。スケールのに。おう。そいつは儂だつて怖いな）

苦笑すると、懐から取り出した布で剣身をざっと拭い、無造作に鞘に収めた。

肉厚で、柄の長い片手半剣であった。

もつとも、本人は軽々と片手で扱っているが、ヒューマンやドワーフの膂力と体格では、長大な両手剣として扱われる。もしかしたら、大きすぎて剣として扱えないかもしれない。だろう。

「どうにも締まらねえな、こりゃ」

肩に手をやって首をほぐしながら、がははっと笑う。

「……で、アンタら、ちよいと尋ねるが、助けてよかったんだよね？ いや、なんとなく勢いで助けに入っちまったわけだが」

軽くおどけた調子で聞く。

身も蓋もない事を言えば、怪物に対する偏見で助けたようなものである。

助けた中に昼間知り合ったヨハンがいたのも結果であって、銚の前に割って入るまでは、ディアロにはサムヒギンと戦う理由は何もなかったのだ。

もちろん、命を救われて困る者は基本的には存在しない。

ダーヴィッツもヨハンも人足たちも、それについては、とても感謝していた。

「もちろんです。助かりました、ディアロさん」

やはり、最初に口を開いたのはヨハンだった。人足たちも口々に礼を言う。

ダーヴィッツも、軽く頷くことで同意を示すと、音の出所を考えることは一旦止めて、救援に対する謝意を述べた。

「ええと、ディアロさんでしたか。危うい所を助けていただき、ど

うもありがとうございます」

「なに、気にしない。たまたま居合わせた儂が、好き放題に暴れまわっただけのこと」

礼を言われた当人は、のほほんと返した。

そして、辺りを憚るように声をひそめると、内緒事を打ち明けるように。

「実は調子に乗って連中を全員叩ききつちまってから、『待てよ。避難訓練に雇われた怪物役の役者だったらどうしよう』ってなもんで、内心でドキドキしてたところだよ」

そんなことを小声で、ただし皆に十分に聞こえる大きさで言った。無論、この辺は冗句であろう。

怖いものとして無さそうな、見るからに肝の太い大男が、そんなことをしごく真面目くさった顔をして言うものだから、みんな思わず笑ってしまった。

緊張で身も心も強張っていた反動だろう。その場はどつと大笑いの渦に巻き込まれた。

明らかに場の空気が変わった。

敵めしい顔に反して存外茶目っ気がある。

ダーヴィッツも笑った。

むしろ、率先して大きな声で笑いながら内心で舌を捲いていた。

(よく人心掌握の術を弁えてらっしゃるようで)

先ほどまで人足たちの中に存在していた己への壁　圧倒的な強者への恐怖心を、それがたとえ一時的な物であったとしても、これほど軽々と取り去るとは。

今後の参考にしたいくらいな、実に見事な手際だった。

それに空元気の空笑いとはいえ、笑ったおかげで、聞こえてくる物騒な響きへの過剰な恐怖心も少しは治まったようであった。

人足たちが恐慌にとらわれないように、監督と協力して当たらねばと考えていたのだが、もはやその必要はあるまい。

ダーヴィッツはそつと目礼した。

するとディアロはにやりと笑って言った。

「それより、アンタの避難誘導、まったく堂に入ったもんだったぜ。的確で素早い判断だ」

「いえ、それもディアロさん、貴方が時間を稼いでくださったおかげです。どころか一人である数を殲滅されるとは……」

実際、驚嘆すべき戦果だった。

商売柄、傭兵や軍人、冒険者などの戦いを生業とする人々は数多く見てきたが、それでもこれほどの使い手は滅多にいない。

(ベネンシア卿と好い勝負ができそうですね)

親交のある衛兵隊の中隊長のことを考える。

恐らく、あの槍を得意とする若い騎士は、今頃はあの喧騒のどこかで槍を振るい、指揮を執っているのに違いなかった。

衛兵 2

一陣。

飄風が舞った。

鉄の穂が揺れる都度、生命が刈り取られていった。

振るうのは一人の騎士で、振るわれるのは鎌ならぬ一本の鎌槍だった。

女騎士は 兜に隠れて顔の形は知れなかったが、鎧を着込む暇は無かったのだらう、黒革の胴着の下のなめらかな体の線は女性特有の形をしていた。

顔の造作の上手下手は判然としないが、全体として、形の好い娘だった。

どこかが特に目立って美しいということもないのだが、とにかく姿勢が整っている。

足運びも見事なもので、爪一枚ほどとはいえ積もった雪に足跡は目立つ。多数を相手取っての乱戦ともなれば尚更だ。だというのに、彼女の足元のそれは、驚くほどに乱れてはいなかった。

体幹の制御が抜群なのだろう。

そしてそれは上体にも及んで、彼女は実に巧みに槍を操った。

ある時はホウキで小石を掃くような気軽さで足を払い、またある時は八タキで燭台の埃を撫で落とすようにして、軽く腕を叩いて攻撃を逸らした。

そして、どちらかと言えば小柄な部類に入るであろう体軀から繰り出される、一見緩やかな、その実は暴風めいた直幹の一突き。

地母神が揮う 疾風の鎧 もかくやあらん。

水面の下から現れた醜悪な蛙面の妖物たちが、地面の上に次々と屍を重ねていく。

なまじっか彼女と相対する怪物たちが、鉈や槍の長柄の武器を小器用に扱うものだから、人妖双方の技倆の奥行き、得物の掌握、動

作の美しさ、その差が酷く際立った。

女は彼女の槍が届く領域を完全に支配していた。

だから、その空白も彼女が狙って作り出した物だった。

槍者は楯円を描くように槍を振るって、怪物たちを何歩か退かせると、自身もまた少し敵から距離を取り、周囲を一望して、ふいに声を張り上げた。

「怪物との戦いに不慣れな者は！ 無理をして一対一で戦おうとするな！ 周囲の者とで連携し、一体ずつ確実に仕留めて行け！」

喧騒の中にも良く通る印象的な声だった。

大声で指示を出すことに慣れている人間の発声だ。

若々しい、甲高い声音。

カラビンカやメローの血統が備えるような、音楽的に美しい声というのとはまた少し違うが、多くの人間が魅力的な声だと評価するだろう。

応！ と周囲の部下たちが応えた。

あまりにも一人、隔絶した技を有するがために、他の者たちの影をすっかりと薄いものにしてしまっていたが、彼女も別に一人で戦っているわけではなかった。

それどころか、実際には自身の武技を惜しげもなく披露する傍ら、そこまでの戦闘技術を持たない一般の兵士たちを助け、時に怯みそうになる部下たちを叱咤して、怪物迎撃の戦いを指揮していた。

彼女は名をベネンシアと言った。

ベネンシア・ファン・オルドス。オルドス荘の主にして、アイレンベルク衛兵隊の中隊長の任を拝する若き騎士であった。

衛兵隊はアイレンベルク市内およびに辺境伯領内の治安維持と領民の安全保障を担当する部隊である。

都市内部に侵入者があつた時に備えての訓練も 半ば形骸化していた嫌いは否定できないが、それでも想定はされてきた。

今こそそれを活かす時であつた。

若き隊長の命じるところに、四十名ほどの部下たちは好く応えて奮戦した。

その多くは実戦経験を持たない警邏の兵だつたが、オルドス家子飼の生え抜きたちを、班長として小集団の取りまとめに配してあるので、その点はあまり心配していなかつた。

彼らが上手く差配してくれるだろう。

不安要素があるとすれば、兵員が定数を大きく割り込んでいることと、自分もそうだが、突然の出来事に押つ取り刀で出動するのが精一杯で、装備が不十分 特に身を護るのに欠かせない甲冑が貧弱な所か。

非番だつた者の中には、よほど慌てていたらしく、肌着に火かき棒だけを持って駆けつけたような者までいた始末だつた。

流石にそれは、あまりにあまりと言うものなので、内心大笑いしそうになっているのを隠して、強いて作ったしかめっ面で、叱りつけて装備を整えさせに戻したが、

ベネンシア自身、槍を掴み、鉄兜を被つた他は、黒い革製の胴着に同色の脛当てと普段通りの姿である。

「もつとも。防具を身に帯びていないのは敵も御同様らしいがな。

それに、見る！ 幸いに人間型の生き物連中だ。日頃鍛えた人間相手の戦法を、ある程度までは、そのまま素直に応用できるぞ」

相変わらず顔は見えないが、兜の奥には笑つたような気配があつた。

あるいは作り笑いかもしれないが、皆に聞かせるように、勇ましい笑い声で語りかける。

「考えてみる。日々の訓練では間違っても最後まででは行えない、殺人技の数々を、実地で試す好い機会だぞ。遠慮は要らん。存分にやれ！」

ベネンシアの物騒な激励に部隊の一同は勇猛に笑った。

足を突けば動きが鈍るし、腕を叩けば武器を取り落とす。頭部を潰せば息の根が止まる。簡単だろうと豪快に笑った。

もちろん、言っている本人を含めて、誰一人本当に「簡単」だと考えてなどいないのだが、皆、それを信じた振りをした。

「ただし！ 繰り返すが、くれぐれも一対一で敵そうなんて考えるなよ？ 無茶をして、怪我をするなど阿呆の所業だ。どうせ、騎士道精神を発揮したところで、応えてくれるような連中ではあるまいからな」

そう指示を下す本人は、一人で複数の水妖を向こうに回して戦っていたわけだが。

そこかしこから「自分たちは騎士じゃありませんので」「隊長殿は阿呆つてことかいな」「怪我一つないんだから阿呆つてことはいんじゃないか？」「なら馬鹿か」「槍馬鹿だな」「あと馬鹿騎士だ」「違くない」などと信頼に満ちた野次が飛び交う。

「おい！ 聞こえているぞ。それより一人どいつだ、馬鹿騎士とか言った奴は。せめて順番を変える。それだと意味が変わってくるだろうが」

ベネンシアは苦笑を浮かべた。

この連中と来た日には。

まあ、これだけ軽口を叩く余裕があれば、なんとかなるだろう。そう思った。

それに、部隊の定員割れについても、ここ百年と言うもの、戦争中を除いては、定数を満たした試しは無かったので、あまり気にしてはいない。

元々、川べりや運河沿いの比較的開けた場所とはいえ、野外とは比較にもならないほどに狭い街中での戦いである。数ばかり多くても、多分かえって被害が大きくなったただけだろう。

そう考えれば、ここにいる者たちは、自発的に兵役に服している分、士気も高く、戦いの技も練れている。

日々の警邏の仕事を通じて街の構造を熟知しているのも大きい。

他の所で戦っているはずの余所の騎士家率いる部隊の数々も、その点は一緒に違いない。

また、装備の不十分は大いに不安とする所だが、それとても、街を流れる川の中から現れた怪物などという想定の外事態に、まがりなりにも好く対応したと褒めてやりたい。

アイレンベルク衛兵隊オルドス中隊は勇猛果敢に戦った。

対する怪物たちは、数こそ多いものの結局は烏合の衆だった。

それに、恩賞目当てだろう。

街に滞在していた冒険者や傭兵といったゴロツキ連中も、勝機ありと見たらしく（勝ち目がないと判断すれば、さつさと街を見捨てて別の場所に向かっていたに違いないのだが）、いつのまにか戦列に加わっていた。

翼を備える飛天の鉾槍使いが上空から急降下してはまた空に舞い上がり、地上では巨漢の獣人が大剣を振り回しては当たるを幸い、怪物を薙ぎ払っていた。

遅れて出て来ただけあって、装備も万全である。

ドワーフはお得意の魔法の道具を駆使して、メローの呪術使いが川の水を操って上陸しようとする足場を滑らせ、水の手で怪物の首を絞め、それぞれに殺していく。

わざわざ荒事に首を突っ込んでくるだけあって、揃いも揃って腕利きだった。

だんだんと各個撃破されて、化け物はその数を減らしていく。

(なら最初から出てきやがね。とは言え助かったのも事実か)

内心で軽く呪詛を送ったりもしたが、感謝していたのも事実である。

「各々方！ 御助力感謝いたします。事が収まった暁には必ずや、都市より御礼の沙汰がきましょう。さあ、あと一息、共に手を携えて、力を合わせ、怪物の掃討と参りましょう！」

日頃、ベネンシアの口からもれる言葉といえば、砕けた物ばかりなので、部下たちは目を白黒させたが、彼女とてこれくらいは普通に言える。

口にした当人がかなりの違和感を覚えていたのも確かだが。なお、御礼の沙汰としか言わないのが味噌である。

ふと、ベネンシアは妙な気配を感じた。

それは難敵との戦いの予兆を嗅ぎ取る、鍛えぬいた戦士に備わった嗅覚だったかもしれない。

己の勘を信じて、水辺に近い兵たちを急いで下がらせた。

と、ほどなく水面が激しく波打った。それはやがて巨大な渦巻きへと成長した。

それが、ベネンシアの視界の中にある分では三箇所。

大渦から巨大な腕が飛び出した。次いで頭部が出現し、両手を使って穴から這い出るようにして、胴体、脚部と現れてくる。

実際、這い出ているのかもしれない。

明らかに川の水深より身長が高い。

それまでの雑兵に数倍する体格を誇り、禍々しくも美々しい武装で身を飾った、巨大な怪物だった。

ひょいっと巨体に見合わぬ軽やかさで飛び上がり、上陸した。地が揺れた。

「種族の勇者か、上位種族ってどこ？」

声を作るのを忘れて、素の声で呟いた。
途端に少女めいた声になった。

海魔 1

凍りついた緊張と、裏腹な熱狂とが場を満たした。

妖魔たちは貴顕の降臨を歓呼して迎え、人間たちは大物の登場に迂闊な手出しを躊躇った。

どちらからともなく一步下がり、二歩下がり、距離を保って敵対者たちは互いににらみあった。

しばし戦闘は中断された。

指揮官としてベネンシアは改めて戦況を確認した。

ほとんどが大小の怪我を負っていたが、死者や深刻な負傷者はまだ出ていなかった。

対する魚妖は既に大半が駆逐されていた。

ベネンシアは改めて戦慄した。部下たちも少なからず動揺している。

何故逃げない。

これが尋常の戦いであれば、衛兵たちの勝利でとつくに決着がついていただろう。

けれど、攻め手は微塵も諦める気配を見せなかった。

それどころか戦意はますます高まっている。

それが新しく戦場に現れた巨大な海魔の威を受けての物であることは明らかだった。

ベネンシアは上陸した海魔の巨体を仰ぎ見た。

紅鱗で身を飾った巨人である。あるいは巨大な魚人と言うべきか。揺れ動く篝火の灯に全身の鱗が妖しく光り、相応に巨大なエラ蓋が前後に動いた。

先行した雑兵たちは直立した蛙を思わせたが、新たに現れた巨大な怪物たちは、見た目はより魚に似ていた。

ただし四肢を有するなど完全な魚というわけではなかった。

前者が鱗の生えた蛙だとすれば、後者はやはり鱗の生えた山椒魚

に喩えられるだろう。

不思議と蜥蜴めいた印象はなかった。

まばたきをする機能を持たない真円の瞳は、いかなる感情も読み取らせはしなかったが、底知れぬ異界の知性を窺わせた。

眼の上に目蓋はなく代わりに半透明の膜が覆っている。

水中生活者の瞳だ。

異形である。けれども醜悪ではなかった。

中でも三体中の主導的立場を占めるらしい一体の威風堂々たる立ち姿は高位の貴族とすら想わせた。

雪の舞う川縁に紅鱗の魚怪が立ち上がった。

畏怖すべき異界の美。

身の丈およそ三十スー（7.5メートル）。

当然胴回りもそれに比例して立派だった。

そして重量を支えるに足りる大柱のような後ろ足。

これまでベネンシアが遭遇した怪物の中で最大の存在は、身長二十スーの丘巨人。槍が風を切り、棍棒が丘を平らにした熾烈を極めた一騎打ちの末に打ち倒した。であったのだが、その記録を軽々と塗り替えていた。

さらに言えばただ大きいだけの野獣ではなかった。

豪壮でもあり絢爛でもある黄金色の甲冑に身を包んでいた。

よもや本物の黄金のほすはないが、希少性云々の前に、柔らかすぎて武器防具に適さないのもさることながら、重すぎて泳げまい。しかし、黄銅というわけでもなさそうだった。

付与術師がよくやる、金箔や鍍金を触媒として黄金の不滅性を仮初に与える技法か、錬金術師が作りだした、強度こそ僅かに鉄に譲るものの、同体積で三分の一の軽さを誇る合金、黄金の鉄の産物だろう。

そして、手にするのは精緻な細工が施された三叉の槍。

ベネンシアはしばし槍の美しさに心を奪われた。

儀礼用の風格と戦陣用の威風を兼ね備えている。

武器甲冑ともに名工の作と思われた。

一方、小さな方は僧服めいた物を纏っていた。

こちらは一転して質素な作りである。

体軀も鎧武者に比べればだいぶ劣る。鱗もくすんだ黒に近い灰色だった。

それぞれ十スーほどであり、その者たちも既に巨人の形容に相応しい巨軀であったが、それとても、主領格の一体を前にしては、まるで小人のようだった。

もつとも、すぐ傍らに立つ比較対象が巨大すぎるばかりに起こった錯覚に過ぎないのも明白ではあったが。

雪はいくらか勢いを強めていたが、みぞれが目立ちはじめてもいた。

そのうちに完全な雨降りに取って代わられるだろう。

そのせいで、地面は氷菓子を一面にこぼしたようなありさまだった。

転倒の危険が高い。足元に注意しなければならない。

雪の音と雨の音に、撒き散らされる水の音が混ざった。

海魔の巨大な体や武具甲冑から落ちこぼれた水が、ばしゃばしゃと勢いよく飛び散ったかと思うと、辺りを漂う空気に、もわっと生臭いものが混じった。

まともに嗅いでしまった者たちが思わず咳き込んだ。

強烈な臭いに、ベネンシアも思わず身を反らせた。

これは……。

生魚の臭いに似ていたが、恐らくそれだけではない。

「こいつは潮の匂いだな」

男臭い重厚な声が響いた。

誰か近づいてくる気配にベネンシアが振り向くと、銀毛豊かな獅子頭の戦士が歩み寄ってくる。

先ほど確認した傭兵ないし冒険者の一人だ。

大剣と大盾を使って縦横無尽に戦っていた。

ベネンシアがその名前を知るよしもなかったが、ディアロ・エウインである。

「まさかこんな内陸で嗅ぐことになるとは思わなかったが。いんや、不意打ちだったもんだから、実際以上に刺激が強いのか」

男はかなり閉口した様子だった。

「……潮？　すると海か。海というのはこんな臭いがするものなの？　鼻が曲がるかと思った」

嗅ぎ慣れない臭いに、軽くえづきを覚えながら、不快げな表情でだとすると海辺の街とはよほど過酷な環境に違いない、とベネンシアは思った。

ディアロは苦笑いらしき物を顔に浮かべた。

「まあ、普通はここまで強烈な臭いはしないんだがな。ほれ、大分は奴さんらの体臭と甲冑にこびりついた臭いだな」

銀色の人獅子。ディアロは顎をしゃくって怪物たちを示した。

「ところでアンタがベネンシアさんだね？　槍の達人で、一目見れば判るでしょうって話だったが、まさにだな。おっと、言い遅れた。ダーヴィッツの旦那から、アンタを手助けするように頼まれてな。

『もし出会ったことがあれば、ベネンシア卿の与力に入ってはもらえ

「ませんか』ってね」

「そうか。アーネスト小父が」

フルネームはアーネスト・ダーヴィッツである。

旧知の人の好意に、ベネンシアは心地好い感情が沸き起こるのを感じた。

「まあ、実を言えば、アンタがあまりに強いんで『おいおい。こいつは手助けの必要なさそうじゃないか。終わってからノコノコ出てくのもバツが悪いし、いつそ出会えなかったことにしようか』なんてことを、さっきまでは考えてたんだが。幸か不幸か、大物の登場で、お役に立てそうだと思い直して、こうやって参上した次第だ」

「冗談ともつかないことを一息で言う。

「しかし、なんだってまた神格への階に片足つつこんだような輩が」

解せない。とディアロは小声で独白した。

「あなたはアレが何か知っているのか？」

「ありゃあ、海魔の上將軍だな。それと坊主が二体か。なんでこんなところに居やがるのかは知らないが」

シー・ジェネラルにシー・モンク。

ベネンシアの問いにディアロは簡単に説明した。

最初に登場した蛙面が海魔の奴隷階級だとすれば、後から現れたのは海魔の貴族。つまり祭司・戦士階級である。

「僧正級ではなさそうなのが救いだね」

また一つ声加わった。呪術師風のメローがひょっこりと混ざってきた。

「だなあ。連中、陸地に海を召喚しやがるからな。それとして、潮を薄めてくれたのはお前さんってことで好いのかい？」

「俺とあっちのドワーフの旦那が半々ってとこかな」

二人の口ぶりからすると、悪臭が消えているらしいとベネンシアは驚いた。

というのも彼女は未だに悪臭に悩んでいたからで、もしや鼻がイカレタかと大いに焦った。

だが、ふとベネンシアはあることに気づいて兜のバイザーをあげた。

大気が消臭される前に入り込んだ臭いが、兜の中に籠もっていたのだ。

思いつきり深呼吸をした。

「へえ！ これは驚きだね。隊長さん、随分と美人さんじゃないか」

メローは口笛でも吹きそうな勢いで称賛した。いささか軽薄な性格をしているらしい。

実際、ベネンシアはなかなかの器量を誇った。

北国の女性らしく色白で、耳や唇、眉の形も整っている。平均より幾分か大きな鼻はいささか高圧的にも見えそうだったが、たれ目ぎみの淡い瞳が、ちょうど好く釣り合いをとっていた。

小柄であることも相まって、おっとりとした良家の娘風の美貌である。

惜しむらくは、中身は淑やかという言葉とは無縁であったことか。

「当然」

ベネンシアは称賛を軽く受け流した。

「あらまつ。それで、話を戻すけど。獅子の兄さん、やりあったことがあるって口ぶりだね」

「東のほうで何度かな。僕は普段はパルマを拠点にしてるんだわ」

ディアロが口にした言葉にメローは納得した様子でうなずいた。

《探求者の街》パルマ。

大陸東海岸の港町である。都市を上げて航路の開拓や遠征を行っており、妖魔との抗争もしばしばと聞く。

「洞窟の中の祭場が突然海に変わった時は溺れ死ぬかと思ったもんだが、後で聞いた話じゃ沙漠ですら可能だってんだから、こんな川辺の街くらいお手のもんだらうなあ」

ディアロの危惧を含んだ嘆息に、メローは笑って言った。

「いやいや。川や泉は淡水、真水だからさ。水神の影響が強いもんだから、かえって海を呼ぶのは難しいと思うよ。オマケにこの街には 水霊王 を祀る大伽藍が建つ聖地の一つだし」
「なるほどなあ」

今度はディアロが納得した。

彼らが暢気に話していられるのには理由があった。

武將を筆頭に三体の高位海魔たちは、衛兵や冒険者にはほとんど注意を向けてこず襲い掛かったてくる気配を見せていなかった。

出現からこっち、ずっと何かに気をとられているように見えた。

「悪いんだけど。アナタ方は二人して何か分かり合っているみたいだけど、自分にはまったく何が何やらなんだけれど。結局、あの三体は上位の種族で、恐ろしい魔法を扱う僧正がいないから少しはマシって理解で良いわけ？」

「いやあ。それがなあ」

ディアロは少し困ったように苦笑いを浮かべた。

「たしかにそういう意味では不幸中の幸いではあるはずなんだが。

あの將軍様がどうにもまずい。ことによると、僧正が群れをなして襲い掛かってきてくれたほうがマシだったかもしれないくらいだ」

「本当、長生きしてらっしゃりそうで」

「どういうこと？」

「あの連中に寿命があるのかどうかは知らんがね。歳を重ねる毎に際限なくデカくなって行きやがる。そういう種族だ。だもんで大きさを大体の年齢が解るんだが、ふむ、あの大きさとそうさな……八百年、いや、もう四五十年は生きてそうだな」

「それはまた随分と長生きする種族だな」

ベネンシアは目を丸くした。しげしげと海魔の上將軍を眺める。

妖精や竜の血族などには数百年、数千年を生きる者も少なからず存在すると聞き及ぶが、実物を目の前にするとやはり驚く。

「まず当たり前の話だが、巨大な体つてのはそれだけで脅威的なものさ。だが、あの連中が厄介なのは、それとはまた別のところだな」
「そういえば、さっき『神格への階』がどうのと」

呟いていた。

その時も気になったのだが、話の流れるに任せて忘れていた。物騒であるし意味深な響きでもある。

「成るんだよ。竜にな」

海魔 2

竜はひとしく神であり、そして、神は不滅である。

海魔は海神の眷属であり、彼らは強固な信念を持っていた。

年功を積んだ海魔は主神の恩寵に浴して竜神と成って、やがて海の果てるところに在るとされる、他界の君が統べる波の間の宮廷に、廷臣として迎え入れられると。

それが果たして真実を語っているのか、単なる妄想に過ぎないのかは、あらゆる信仰がそうであるように定かではなかったが、彼らがそう固く信じているのは確かであり、年経た海魔が竜へと成るのも本当だった。

学者は言う。

すべては信仰の力、意思の力であると。

種族全体で共有される竜化信仰の想いが凝って神格を生じ、それを得た老海魔は若い神へと生まれ変わって、その身を強靱な竜に変じる。

自らを神の眷属であると思ひ定め、信じ抜く強い心。

流れ行く時の果てに、竜体を得るといふ確信。

その強固な信仰が、彼らを遂には竜へと変貌させるのだ。

一部の巫術師が用いる降霊術つまり 口寄せ や かみおろし、あるいは 精霊憑き の身にしばしば起こる肉体の変異現象が、より強固に、かつ永続化したものではないかと考える者もいた。

「ま、この仮説が正しいのか正しくないのか、それは僕には解らんが、奴さんたちが竜に成るのは確かな話で、現実問題、竜は強い。そりゃあもうべらぼうに」

ディアロは過去に三度竜と遭遇したことがあった。

「否、違うな。正しくは『怖い』だ」

埋み火が息を吹き返すように、怖れが、奥底から蘇る。

竜と対峙した者にしか解りえない本能的な恐怖に心が震えて、身を強張らすのをディアロは感じた。

怖いと呟いたきり、口を引き結んで後は何も語らず、じっと宙を眺める。

そこに竜を見た気がした。

怖れの名残は、当時感じた全体からすれば、ほんのしぼりかす程度に過ぎなかつただろう。それに、これほど僕は怯えるのかとディアロは愕然とした。

思い返してみても、自分のことながら、よくも今まで命を永らえたものだ。

「それほどに？」

獣人の様子にベネンシアは本当に驚いた。

たとえ心の中でどれほど恐怖していたとしても、怯え動揺する姿をあからさまにする人間ではないことは、少し話しただけでも明らかだった。

加えてこの男は卓越した戦士である。

恵まれた体格に練り上げられた戦の技。

遠目にも優れた使い手に見えたが、近くで見ると、やっぱり隙がな

いなと、感嘆していた。

それが傍目にも明らかなくらいに怯えている。

自然と女騎士の表情も深刻なものとなる。

ベネンシアの問いかけに、ディアロはかぶりを振った。

反射的な動作であつたが、それでディアロはふと我に返った。

苦笑せざるをえなかつた。

言うならば思い出し怯えだろうか。影に怯えるとは情けない。

改めてもう一度大きく頭を振って、益体もない恐怖を振り払う。

「いや、すまねえな、ベネンシアさんよ。おかげさまで目が醒めた」

大きな身体を躍らせるようにして、全身で感謝の意を表す。

その動きは大袈裟で、一步間違えれば滑稽なくらいに激しかった。

最初、ベネンシアは、男が照れ隠しにおどけているのかとも思ったが、すぐに、そうではないことに気づいた。男は真剣に、心の底から自分に礼を告げているのだ。

というのも、ディアロは深く恥じていた。

海魔の群れが、依然動きを見せないとはいえ、戦闘に肉薄した場面で茫然自失棒立ちになるなどと、あつてはならない失態だ。

彼は生来鷹揚な男であつたが、それにしても、彼にも剣を生業にする者の自負がある。

だから自然とベネンシアも真剣な気持ちで応じた。

それから改めて問いかける。

「それほどに恐ろしいと？」

ディアロは深くうなずき、そして三度かぶりを振った。

「脅かしちまったが、怖いってのはあくまでも竜の話であって、奴さんは竜じゃない。そうだとすれば怖くはない。少なくとも、気配や体臭を嗅ぐだけで、反抗しようって気を端から捻じ伏せてくる、理不尽な怖さはな」

とはいえ。

「まだ真正の神さまにはなっちゃいないようだが、亜竜や半神並みには成り上がってそうだ」

ディアロの言葉どおり、竜からすれば数段劣るとはいえ、八百年の時を重ねた海魔の武将はそれ自体、疑う余地もなく確固たる一つの脅威であった。

「俺程度の使える術は、まず通用しないと置いていいね」

メローの呪術師が、降参。と両手をあげた。

「元々、俺が得意なのは水の術で、ああいう海魔の手合いには効きが悪いんだ。雑兵の坊ちゃんがたならともかく、あんだけのお大尽にはなおさら無理よ」

魔術にしろ呪術にしろ相性というものがある。

それに元々霊格の高い存在には術というのは効きにくいものだ。

「さっさと逃げ出すのが賢明だとは思っただけだね。隊長さんや兵隊さんたちはそうも行かないか。獅子の兄さんもやる気満々って感

「じだし」

「口約束には違いないが、一度引き受けた依頼を、難しいからって投げ出すのは性に合わないんでな。それに無理だと決まったもんでもない」

ディアロとしては、まだ仕事は始まってすらいらない気分だった。それに、これは口には出さなかったが、依頼人が口入れ屋の主人とくれば、なおさら放り出すわけにはいかない。

「さようで。……まあ、俺としてもさつき雑魚ども蹴散らすのに使った触媒のモトくらいは取りたいんで、お付き合いしましょうじゃないの。なにか向こうの方で、うちのお仲間……ああ、あそこで海魔をにらみながら、アホ面さらして高笑いしてる飛天の娘っ子なんだが、あれも帰る気なさそうだし」

にへらつとメローは笑った。

仲間の方を向くと、ひらひらと手を振った。

「それじゃあ、俺はあっちに合流するんで、お二人さんも怪我しないでいどに頑張ってくださいよ」

「感謝する」

「それにしても、連中どうして動かない」

ベネンシアの疑問は、みな疑問であつたらう。

あれほど盛んに攻撃を仕掛けてきた小妖たちも、魔将が現れた直後から、彼らを守る陣形を保つのを優先しているようだった。

「たしかに妙だな。僕も何度か將軍級の海魔に率いられた群れと戦った事があるが、奴さんたちときたら、蛮勇の塊みたいな突撃を仕掛けてくるのが常のはずなんだが」

そして常に將軍は先陣を切って来た。

「個体差といえはそれまでかもしれないが、なんとも不気味だな……なぬ？」
『上なる方に供物を捧げよ』
『姫さま、公主さま』。連中、そう言ってるのか？」

ディアロは呟いた。

それまで意識の端に追いやっていた海魔の僧侶に注意を向ける。曰く。

『上なる竜』

『海神の娘』

『琉璃之江の公主』
クイール・リエー

海魔の將軍にばかり気を取られていたが、それはまずかったかもしれない。

「言葉が解るのか。連中何を言っているんだ」

「僕が解するって訳でもないんだが……まあ、説明すると長いんで、今は追及してくれるな」

勢いよく聞いてくるベネンシアに、待ってくれと頼むと、ディア

口は改めて耳をそばだてる仕草になった。

ただ、ベネンシアはその姿に微かな違和感を覚えなかった。はなかつた。

海魔の方に意識を向けているというよりは、どことなく上の空になつて考え事をしているような。

「……そうか。結論から言つぜ。ベネンシアさん」

ディアロが硬い声で告げた。

「様子見をしている余裕は僕らにはない。連中、神を呼ぶ気だ」

繰り返しになるが、神は不滅である。

神格を得た存在を滅ぼす術は、現在までのところ発見されてない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9066v/>

水底の夢

2011年10月22日03時34分発行